

坂本航真  
小泉研究室

# 故人との記憶を希薄化させない火葬場の提案

敷地：台場公園（お台場）  
用途：火葬場



## 1. 背景

今現在、高齢社会が急速に拡大している日本において、死者数の増加が予想される中、葬場の数が圧倒的に足りないという状況下にある。首都圏では10日間も火葬場を待つケースも出てきており、今後更に東京圏における火葬場の建設が求められてくると考えらるししかしながら、高齢者人口がどんどん多くなっている一方で、全国的にみると火葬場は減少・不足している。

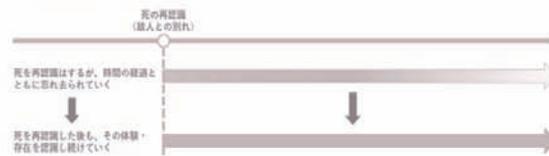


## 2. 興味・関心

日本には古来から死観考という考え方が存在し、死について考えることをタブーなものとしてきた。日本は死を生きる世界と区別したがる傾向があり、そのような考え方を維持してきたが本当にそうであるべきなのだろうか。

私は、祖父の葬儀に参加した際、人間の死というものを感じ、人の終わりというものがあるのだということ考えさせられた。しかし、その死を認識することにより今後の過ごし方に対する意識が変わり、自分が今後どう生きていくべきかを考えるきっかけになった。この経験から、死というものを認識することによって、これからの人生における時間の扱い方・今後の過ごし方を見つめ直すきっかけとなり、それが今後の人生をより悔いのないものへと助長するのではないかと考えている。

しかしながら、その体験・記憶というのは日々の生活の中で薄れていき、次第に忘れてしまう。つまり、「死を認識する体験」という記憶が薄まることによって、「死」自体の存在を忘れてしまうのである。そのため、死を再認識させてくれる機会を有する火葬場において、その体験・記憶を深く心に刻むことが可能である火葬場を計画する。



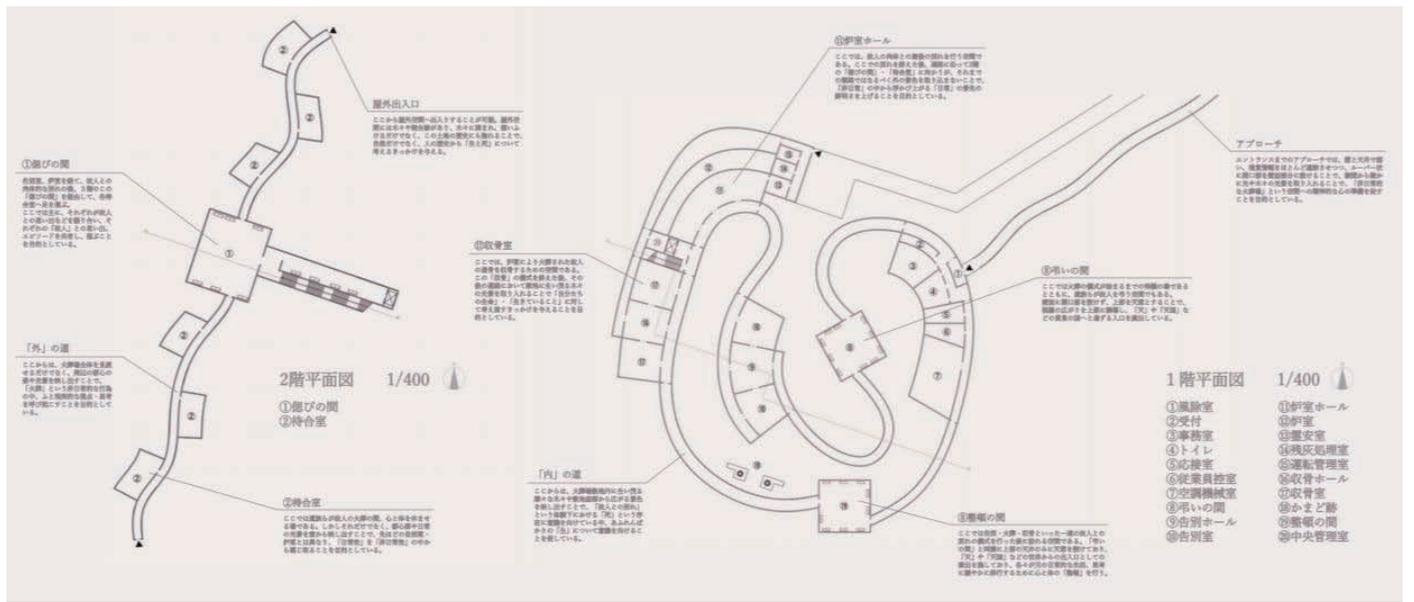
## 3. コンセプト

一人故人との別れという記憶を忘れない、思い出に残る火葬場—

死とは生きとし生けるもの全てに平等にあるものであり、日本では死を日常と区別したがる。本計画では、今自分が生きていること、そしてこれからの過ごし方に対する意識が変わり、自分が今後どう生きていくべきかを考えるきっかけとなる「死と向き合う体験」をより記憶に結びつくるものとしての最後の別れの場である火葬場を設計する。火葬場においては、死を特別視するのではなく、死を日常の延長線にあるものと捉え、葬儀や火葬を終えた後もその世界観と日常を区別することなくつなぐような、死を日常の一部として捉えることを促す火葬場を計画する。

しかしながら、それと同時に遺族にとっても、その関係者・参列者にとってもその体験・記憶が心に深く刻まれるような空間を目指したい。故人との別れの記憶、そして「死」に対する認識が希薄化している現代において、火葬場における「火葬」という体験を通して、その体験・記憶をより心に刻むものとするので、その後の生活においてもその事実を忘れず認識し続けることを目指す。





#### 4. 周囲からの見え方

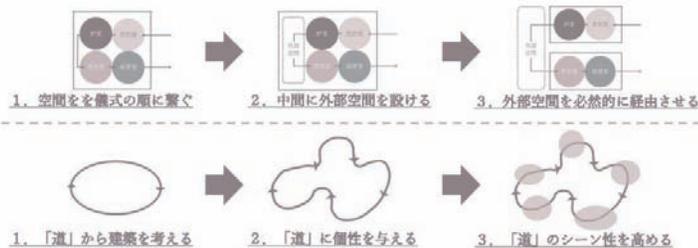
●火葬場を扱う人にとっての見え方（内部から）  
 火葬場に訪れる人々にとっては、その内部で「生（命）」に触れるような、光の取り入れ方、日常的景色の取り入れ方、庭園計画を計画する。故人との別れという体験の中で「死」だけに焦点や意識を向けるのではなく、「生」を感じられる空間であり、その非日常的な状況下の中で私たちが日々おこなっている日常や生きることに対して改めて考え直すきっかけを与える火葬場を目指す。



●火葬場を扱わない人にとっての見え方（外部から）  
 火葬場を扱わない人にとっての見え方、つまり周囲からの見え方としては、今自分たちがいる日常的な空間・思考の中からその火葬場を見ることによって「死」を捉えられるような、あるいはその「非日常性」を認識させてくれる外観・見え方を計画する。「死」をそのまま認識せずとも、その建物自体に興味を持ち、自ら調べることによって「火葬場」であることその「意味」を自身で認識することも意味があると考えているためである。



#### 5. 「道」に焦点を当てた内部空間の構成



#### 6. 「道」に対する考え方

「告別室」や「伊室」などを繋ぐ「道」自体に個性を与えることにより、同じ道でも行と帰りで異なる空間を演出することを計画する。また、道の前半部分では、壁面などの側面における開口部は比較的狭い面積で設けて、外部空間に近づくにつれ外の景色が広がるように開口部の面積や配置数を増加する。



尚、後半では光や外の景色を前半部分よりも積極的に取り込むことを計画している。外部空間を経て、「故人」に対する視点からその後、「生と死」に対する視点へと視野を広げることを促すことを目的としている。「死」に触れている中で、今までの「生」に対する捉え方を再構築するきっかけを与えることを計画する。

